どいへりき、

〔古今要覽稿時令〕四時　夫よつのときは四時なり、四時之爲言四季なり、四季は四選なり、四選は春夏秋冬なり、春夏秋冬、是をよつのときといふ、このよつのときの名目の、かけまくもかしこき皇ら御國にて、物にみえ初しは、神代にはじまれり、いかにとなれば、古事記、日本書紀等に、春夏秋冬の文字、既に出たれば、これらをや證とはすべき、こゝに有二神弟名春山之霞壯夫と古事記いひ、又夏高津日神、秋毘賣神、冬衣神同上の御名見えたれば、いとふるき事なり、されば春夏秋冬の名をもて、既に其頃神々の御名に冠らしめ給ふなり、こゝをもてみれば、はるかにその以前より、春夏秋冬時をたがへずして、四時の和行なはれ、春立夏過秋至冬往し事しられたり、また素盞嗚尊春則重播種子と日本書紀いひ、又日神尊以天垣田爲御田時素盞嗚尊春則塡渠毀畔と上同いひ、また秋則於天班駒使伏田中と上同見えたるぞ、春といひ、秋といふ事の始にて、たしかなる證とすべし、この以前既に伊弉諾尊、伊弉冊尊の、豐秋津洲を生み給ふことみえたれども、秋津洲の秋は、春秋の秋とたしかにはいひがたし、春則みぞをうめ、秋則あまのふちこまを、御田の中にふすとみえたるぞ、共に農作の事にかゝれば、四時の春秋なる事義明らけし、また春過而夏來良之と萬葉集いひ、秋立者黃葉頭刺理と上同いひ、冬木成春去來者と上同いふも、共に四時の移りかはれるさまを詠せしなり、また伊波比回禮、四時自物と上同いふは、玄〻といふけだもの、名に、四時の文字を假用ひ、また春夏秋冬の祭を、四時祭と延喜式いひ、また四時を春夏秋冬と和名類聚鈔いひ、また春爲青陽、夏爲朱明、秋爲白藏、冬爲玄英と拾芥抄いふも、則四時の事なり、又四時を四季といひしこともあり、四季異名何と塵囊鈔いふ、その下に各に四時の異名を擧たり、またよつのとき四季なりと藻鹽草いひ、春は四時の始にして小陽なり、一年の始なれば、賀する事四時の中に勝れたりと續節序記いへり、又西土にては四時といふ事の、ふるく物にみえしは、周易をや始とすべき、曰日月不過、而四時不惑と周易